

吉川英治



二人天皇のいずれが正統なのか。尊氏は逆賊で正成は忠臣か？人間の業、権力の魔性故に欲望が狂い踊る無限の暗黒時代をかき探る。

私本太平記

三

六興出版

吉川

私

江苏工业学院图书馆藏章

平記

第三卷

帝獄帖(続)

世の辻の帖

私本太平記 第3巻 (全8巻)

平成2年7月25日 初版発行

平成2年11月10日 2刷発行

著 者 吉川英治

発行者 賀来壽一

発行所 株式会社六興出版

〒112 東京都文京区水道2-9-2

電話 03(943)3431 (代表)

振替 東京1-92448

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

©1990 Fumiko Yoshikawa. Printed in Japan

定価はカバーに明記してあります。

ISBN4-8453-0409-0 C0093

目

次

帝獄帖（続）

女房

車

.....

7

笠置の

山

.....

14

夢告

抄

.....

32

鳴

動

.....

40

正成出

仕

.....

53

天が下には

.....

69

赤坂

城

.....

88

雪どろんこ

.....

107

婆娑羅大将

.....

120

羅 帝

刹

谷 獄

156 138

世の辻の帖

罪の

曆

.....
181

人

霞

.....
192

四ツ目

結

.....
212

児島高

徳

.....
223

院ノ

庄

.....
242

絶

海

.....
267

夏

隣

り

.....

276

木

霊

.....

290

天王寺未来記

.....

303

帝てい

獄ごく

帖じょう

(続)

女 房 車

「増鏡」の筆者は、この国家的事件のあつた日には、まだ若年か幼少かであつたかも知からない。

けれど宮廷、あるいは宮廷に身近な人ではあつたようだ。その人は、当夜の変を、こう見聞のまま書いていたのである。

——つつむとすれど、武家にも早う漏れ聞えて、さにこそあんなれと用意す。

まづ九重を、きびしくかため申すべしなど定めたり。かくいふは元弘元年八月二十四日なり。雑務の日なれば、記録所におはしまして……。

六波羅両庁と、二条富小路の里内里のあいだは、まさにこんな磨ぎすまされた空気だつたにちがいない。

天皇は、その二十四日も、日ねもす記録所（政務

所）にお励みであつたとある。——そして宵ごろ、おつかれの身を、しばし本殿に憩わせておいでになると、なにか、中門廊の方で、

だ、だ、だ、だ

と、あわただしい足音だつた。

清涼、紫宸の皇居とちがつて、ここは広いといつても、もと西園寺実氏の私邸であつた町なかの館である。何につけお耳うるさい。いつもそれには氣をつかっている三位ノ局廉子がすぐ言つた。

「お上のまぢかです。すこしたしなめてください」

「まことに」

侍座の洞院ノ公敏が、すぐ叱りに立つたと思うと、細殿の西の廂での出会いがしら、北畠具行のすがたに、ハタとぶつかった。

「や、あなたか、いまのあらい足音は」

「一大事だ」

具行は、息をはずませ、

「たそがれから、六波羅の広場、車大路などに、兵

馬の氣負いただならずと聞える」

「それは近頃、常時のこと」

「いや、二千余が、陣をわかち、一せいに馬を餌糧し、あきらかに、戦備のようだという物見の知らせ……どうやら、さきに諸州へ発した密勅が漏れたか、持明院統の又ぞろな密告か」

「そ、それや、こうしてはおられん、ここへも」

「もとより、目ざすはここ。……お上には」

「本殿にいらせられる」

ふたりが、御座のまぢかへ入ってから、いくらもたたないうちだった。

漆掻きに身をやつした森掃部が、門の衛士に誰かされつつ、しいて中門まで馳けこんだので、藏人たちとの間に、烈しい言いもつれを起していた。掃部はすべての咎めに耳もかけず、

「両宮のお使です。花山院どのか、万里小路どのでなくば、御直書、おわたしはできません」

と、必死なのだった。

漸く、花山院師賢が顔をみせて、掃部の手からそれを受けとり、ただちに伏奏のうえ、天皇の目前にさしあげた。

これこそは、いま具行が告げてきた事実を、もつと大きくしかも的確に、裏書していたものといつていい。

「……………」

侍座の諸公卿が、順次、両宮のお文と、忠円の書状を、廻し読みにして、そわそわと、青ざめているあいだを、後醍醐はまだお一ト言もいわず、また、黙視の臉をとじる事もなさらず、かえつて、そのおん眼を一ツの灯にすえて、らんと大きく見つめておられた。

迷うときではない。

また迷っているひまもない。

後醍醐のおん眉は、つねそのままだ、
「噪ぐまい」

と、まず廉子をなぐさめられた。そして次に、側

近たちの、戦ぐ輩そよのような恐怖やら狼狽ろうばいの影へ、

「むしろ、こよいの不慮は、儂みの本意ぞ。かかる事でもなければ、めつたに、動座も思い立てぬ。すぐしたくせよ」

と、命ぜられた。

「やつ、御動座とな」

あらためて、あたりの上達部かんだちべ（上卿）たちは、からだのしん底から、異様な感動につかれたような声を發した。

いまや取る途みちはそれしかないとは分つていたが、動座は天皇の蒙塵もうじんを意味する。——この夜をかぎり、皇都は皇室なき空都くうととなり、この国の歴史の断崖にのぞむ夜となるのかと思うと、いまさらの如く、多年王朝の復古をさけんで来た革新的な若公卿わかくげですら、身の毛がそそけ立ッて来るものとみえる。

「かねての、謀ちようじ合せをふくみ、護良もりなが（大塔ノ宮）と宗良むねながのふたりも、一山の衆徒しゅうとをひきい、白川口しらかわぐち、大津あたりまで出て、待ち迎えんと、書中に見らる

る。——藤房、忠顕ただあき」

「はっ」

「お汝ことらは、ただちに内侍所ないしじところ（三種ノ神器をおく所）へすすみ、つつしんで神璽しんじ、御鏡みかがみなどを捧持ほうじして、早はよう車のうちへ遷うつしたてまつれ。……また公敏きんとし、季房すえふさなどは、供の用意を」

かかるさしずは、補佐ほさの臣こそが、なすべきであつたが、天皇のお声の方が先だつた。さてとなれば、まるで足元から鳥の立つ騒ぎなもの、ぜひがない。

——側近、たれも彼もが、うろたえている。

「廉子」

と、おん眼くばせの下に、天皇もすぐすつくと起つた。そして彼女をうしろに北ノ対たいのぬりごめの一間へ走り入られた。

お身仕度みじたくのためである。

いっばいな涙を眸ひとみに、廉子はみかどの後ろへ、なよらかな直衣のうしをお着せ申したり、御剣みけんを取つてささげたり、また女心に気づかれる物、何くれとなくお

身に添えて、

「……わたくしは？」

と、花の頸を、お袴の下に折った。

「そもじか」

ご思案だった。

恋々たる離別は竜顔をかきくもらせてはいたが、

ふと、幾多の唐土の妃と帝王の例などもお胸をかすめたことであろう。国と女——その比重へこたえるような語気であつた。

「あとへ残れ」

「お供はかないませぬか」

「ここには中宮（皇后ノ禧子）もおり、余の女房の小宰相や大納言ノ局もおる。水仕の末の女童まで、そもじを見失うたら途方にくれて惑い泣こう。よも六波羅とて、女は追うまい。各々、身をよき所へ隠せ。やがて時来たれば迎えてとらせる」

「……はい」

艶姿にはなお、瑞々と垂れるようなものがあつた

が、廉子もう聞きわけのない妙齡ではない。女性の三十一であつた。

「お上。はや御車へ」

外では、扈從が急ぎたてていたし、局々では、不意を知つた女房たちが、いちどに灯を濡らして、泣き乱れていた。

里内裏とはいえ、地域は広大だ。一ときの、御座所のあたりは言語に絶する騒ぎだったが、しかし中門の外、まして外門の遠くへなどは、この夜のこと、何一つ響いてはいない。

月も無い二十四日の闇空、ただ秋の声だけだつた。キキキ、キキ……と奥の木立から軋みめぐつてくる牛車の輪音に気づくと、門の衛士、滝口ノ義数はすぐ衛士小屋の部下を呼ばわつて、待ちかまえ、

「どなただ？ 参られしは」と、誰何した。

出入共に、昨今、ここは嚴重をきわめている。が、星かげの青い暗がりに淀み駐まったのは、一

輜りようの女車と、それをつつむ、ゆゆしい上達部かんだちべのひと群れだった。

宮門の厳戒なればと畏かしこんで、中のひとりが、

「これは、中宮のお実家方に、俄にわかな御病人が出来たため、夜も厭いとわせ給たまわず、おん見舞に罷まかられる御車みぐるまです。——列を遠くにお開きなさい」

と、どこか論きとすような口吻こうふんで言った。

義数は、はっとして、

「では、皇后みきさきでおわしますか」

と、部下を道のわきへズリ退けて、敬礼の姿を執とった。

前驅ぜんくの人々とみえる七、八名の影が、大股にまず門を出て行った。つづいて、夜目にも著しるき白と黒のまだら牛が、車おもげに曳ひいて通る——。

「はて？」

一瞬、滝口の者は、みないぶかしげな眼で見送った。

女車は女車でも、華麗かれいなみ妃車きさきぐるまとも見えない。

窺うれたるただの女房車なのだ。

しかし、車の下簾しただれすその裾からは、何さま、み妃きさきならではと思われるような御衣おんぞの端が垂れ見えていた。

……で、やはりみ妃かな？　と思っているうち、供奉ぶふの駒を曳ひいた公卿、輿こしを昇かいた雑色風ぞうしきふうの者などが二十数人、まぼろしか、影絵のように、どろどろと過ぎて、二条大路を北の方へたちまち消えた。

いうまでもなく、これは天皇后醍醐の御車だった。——敵を計るには味方を計れと、衛門えもんの兵にすらも覺きとられぬように、動座のご一步を、まずはつつがなく踏み出されたものである。

天皇は、み車の内で、女房衣を打ち被かいて、俯うつつ伏ふしておられた。——急に、簾れんを吹く風は、加茂川の冷めたい湿しりをもち、ハタハタと鳴って、ひとしおお胸のときめきを打った。

「ああ、これでついに、籠だのごとき大内裏だいだいりから世間という大空へ翔かけ出たのだ。ふたたび、宮門へ還かえる日には、もはや内裏を、幕府に都合のよい古苑こえんと古

池にはしておらぬぞ。……この尊治（ご自身の名）が、かく大空の下に出て世の大氣を吸ったからには」

車の輪は、車上の君の誓いを知って、その運命の道へひたぶる目ざすように、がらがらと揺れ急いだ。けれどそれも、じつに儚い間でしかなかった。

「しまった。はや通れぬ」

「加茂の彼方、粟田、蹴上ゲを境に、柵が見える。おそらく六波羅の一陣か」

「や、や。いつのまに」

所名の辻占も悪い。一条戻り橋まで来たときだった。供奉の面々は急に轡を抑えて立ちどまった。いや遮二無二、み車を回し初めた。

途方に暮れるとは、まさに、かかる事か。

ひとまず御車を、木蔭に寄せて、殿上ならぬ辻評定が、ただ恟々と、ささやかれた。

そのまに、物見も帰って来た。物見に交じって、終始、お道先の万一を見とどけては、供奉へ報じて

いた森掃部の言はもつとも信頼できる。

その掃部に聞けば。

——六波羅がたは、今日の午下りから、叡山方が、両親王の下知のもとに、一手は雲母坂から、一手は天津へゆるぎ出たのを知り、すぐさま粟田、蹴上ゲに一陣を押し進めた。で、叡山六波羅相互の陣は、逢坂山をはさんで、不気味な暗夜の対峙になっている、というのであった。

「さもこそ」

と、この夕、北畠具行が、六波羅の戦気ただならず、とべつな謀者からうけていた、あの一報もうなずかれる。

人々は、進退きわまつたように、一とき、無言の奈落におちた。と、み車の内なるお声が、

「師賢」

と、召された。

師賢は、轡越しに、近々と何事か承まわっていたが、やがてのこと、み手ずから賜わった香染の羅衣

と、時絵の細太刀を拝して、こなたの群れのうちへ退がつて来た。

「ご決断はお早い」

師賢は、授けられた急場の策を、諸卿へつたえた。すなわち、花山院師賢は、この場からすぐ「身代りの天皇」となつて、叡山へ行けとの御命を拝したのだ。

森掃部を案内とし、輿に乗つて、鞍馬越えから大原の間道を行け。——かつては、平家都落ちの前夜、後白河法皇も暗夜の嶮を越えてゆかれた所である。

むずかしくはあるまい、との御錠。

四条隆資、二条為明、中院ノ貞平らは、それに従え。

そして、後醍醐ご自身は、ここより車を南に回し、奈良へ落ちん、というお計りなのである。——南都も深く宮方に契りおるもの。時を一つに、比叡と並び起つならば、六波羅ごときは一朝に圧倒し去ろう。さりとて、このさい叡山に帝の遷幸を見ずとあつて

は、山門の氣勢を削ごう。玉座の簾裡、大衆のさる気づかいはないから、しばらくは、「身代り天皇」を以て——という、お考えに出たものらしい。

案は、じつに奇策である。だがこの奇謀が、かえつて、御大志の最初のおつまずきになるものとは、後醍醐も思われなかつたし、側近たれひとり、不安に覺えた者もない。むしろ、窮スレバ通ズ——としていた。

こうして、供奉の人数は、出づるやいな、二つに別れたのである。——俄に南へいそいだ御車には、万里小路藤房、季房、源中納言北畠具行、六条ノ少将千種忠顕、按察ノ大納言公敏たちの諸公卿、ほか隨身をいれても、わずか二十名前後。

ここにまた、帝の一ノ宮尊良親王（宗良の兄）は、その夜のことを、ほかにいて聞き知られるやいな、馬に乗つて、単身お父君のあとを、奈良街道の方へ追っかけて行かれた。

笠置の山

ゆらい後醍醐には、ご壮年からもう、大きな御子が多かった。生涯を通じては、三十人をこえる皇子や内親王もあつたのである。

一ノ皇子、中務ノ宮尊良は、みかどがまだ皇太子時代の寵姫、冷泉為子のお腹であるが、そのおん母為子は、後醍醐の即位も見ずに亡くなっている。

——いわば、親なる者は、父のみかどしか知らぬ宮なのだ。——だからその父君の蒙塵を追つて、馬を飛ばして行つた氣もちには、泣く子のような慕情が先立つていたといつても大過あるまい。

「おううい。おういっ」

宮は、やがて行く手の闇に、松明を持たぬ牛車と一ト群れの影が、恐怖に吹かれつつ、急ぐのを見て、「中務です。一ノ宮ですつ。待たれよ。供奉の人

人」

と、遠くから言つた。追手とまちがえて、彼らの狼狽が、みかどを逸まらせ奉りなどしては——と、思つたからである。

後醍醐は、み車の中で、

「誰ぞ」

と、おたずねだったが、

「尊良、おあとより、追つつきまいらせましてござりまする」

という聞き覚えのある御子の声には、よほどうれしかつたのであろう、

「お、尊良なりしか。時にとつて、百万の味方」と、仰つしやつた。

宮が追いつかれた所は、七条か九条あたりか、とにかく六波羅は突破できないから、竹田街道を迂回して、木幡へ出たものにちがいない。

が、どう急いでも、牛車はしよせん牛車である。

かつは暗夜の田舎道にも、行きなやんだ事であらう。